

1960年代の黎明期自閉症児の親の会と全国組織化の過程 ——三重県あすなろ学園とその親の会、および「自閉症児親の会」の関係資料から——

植 木 是

(立命館大学大学院先端総合学術研究科／大阪大谷大学)

1. はじめに

障害や病の当事者や家族・関係者の組織は、当事者の生活や政策に関わり、組織のありようは当事者がどんな生活ができるか（できないか）に関わる。それゆえ、組織の成り立ちに注目することは重要である。1960年代、日本においても様々な社会運動が出現し、多くの全国的な組織が1960年代に誕生している。社会学者の立岩真也は、筋ジストロフィー／重症心身障害児に関わる親・家族の運動について、「なくなりそうなものを守る運動と異なり、何もないところに新たに作る（作ってもらう）運動でもあった」から、「より多く、その手段として、予算を左右できる有力な政治家への陳情というかたちをとることになる。そうした性格がとくに強かった」（2018:40-42）と述べる。

自閉症の組織も同年代に誕生している。1989年10月に現在の「日本自閉症協会」へと名称変更した自閉症児の親の全国組織の前身は、1967年発足の「自閉症児親の会」（別称；自閉症児親の会全国協議会）である¹⁾。しかし、自閉症児の親の（全国）組織に関しては、a.それを担った親たちが亡くなっていく、b.何らかの理由（親の高齢化、本人の死去、本人または親の入院・入所等）で会の活動を離れていく、c.世代間をつなぐボランティアな活動によって担われている、等によって不明なことが多い。とりわけ前史や黎明期については、記録にも齟齬があり、親の会や組織関係者の間でもわかっていないことが多い。それゆえ、今わかる限りのことを調べ書いておく意味がある。特に自閉症の場合は、自閉症自体が世間一般に知られていない時期があり、関わったのも少数の医療機関のみで、医療と教育の機能を併せ持つ専門施設が三重県あすなろ学園のみという時期（1964年～1970年）があった。また、カナー（牧田）派—アスペルガー（平井）派論争²⁾に代表されるように、学派や治療・療育の方法論で、所属する専門機関によって考え方が分かるといったこともあった。自閉症児の組織は、行き場の

ない重度障害児の問題の中から出現してきたことに特徴がある³⁾。重症児親の会を背景に成立した重症心身障害児施設でも、ひときわ処遇が困難といわれたのは、いわゆる「動く重症児」＝「自閉症児」である。日本の「自閉症問題」を包括的かつ詳細に論じた精神科医の小澤勲は、それを「動く重症児問題」と名付け、いくつかある「自閉症処遇前史」の1つとして示している（小澤[1984]2007:404）。自閉症施設も重症児施設と同じように、親たちの運動を背景に出現してきた。本稿では、この時期の自閉症児の親の会の動き、とりわけあすなろ学園の親の会に焦点をあてる。重症児施設と自閉症施設の出現経過にあった「混乱」（小澤[1984]2007:456）した状況の中で、全国親の会の組織化を目指した過程について明らかにしたい。

1.1. 先行研究——自閉症児と親の会、そして自閉症施設に関連して

小澤は、「ようやく1960年代後半になって医療、教育、さらには福祉からも排除された動く重障（ママ）児という名称のなかに埋もれて初めて自閉症は社会問題化した」（小澤[1984]2007:424）、「1960年代末には自閉症論の混乱はその極に達していた」（小澤[1984]2007:54）と述べるが、自閉症児の親の会の成立過程やあすなろ学園の親の会、それらと自閉症施設との関連については言及していない。黎明期である1960年代の児童精神医学会の様子については、「あるケースワーカーから『自分も比叡山の会（何名かの自閉症児を連れてきて鑑別診断を行った集まり）に出席したが、居合わせた教授たちは誰もこの子が入園できる幼稚園がない、遊び場がないという話には乗ってくれなかった』という話をきいた」（小澤[1984]2007:60、カッコ内筆者）と記している。1970年代以降「親の会」とともに活動し、セルフヘルプグループや自閉症児とその家族について研究してきた社会福祉学者の久保紘章は、苦闘する親たちの「出口のない状況」を家族の記録を通して明らかにした。久保は「自閉症児と家族についての理解を深める」（1980:269-271）原動力と

なるようにと、今後の課題をまとめた。しかし、その前史および黎明期の親の会に関しては記述していない⁴⁾。

自閉症施設の成立過程に関する先行研究には、心身障害学・特別支援教育研究者の中山忠政（1997,1998,1999）がある。その記述は自閉症支援の固有性に焦点を当てており、主に制度・政策的な流れを追ったものである。親の会とその支援者たちによる実践的な活動については断片的な記述に留まっている。日本初の自閉症児施設あすなろ学園（1964年1月15日設立）の公式の施設資料によれば、「1962年4月児童青年精神科医療の外来診療の開始（週3回）、5月児童青年精神科医療の入院治療開始（15～20床）、1964年1月あすなろ学園開設（定床60）、1964年4月入院児童地元校通学開始」(1995:11-12; 2005:1-2; 2016:56-57)とある。しかし1960年代、あすなろ学園ほか自閉症施設と、自閉症支援の成立過程で重要なアクターであったはずの「親の会」の活動や、学園と「親の会」の関係性については、あすなろ学園史でも確認することができない。

1.2. 本稿の意義

医療者（専門医）の周辺に集まった人たち（親たち）が作った組織では、医療者が中心的な役割を果たし、長く影響力を保つ場合がある。血友病者に関する組織について数少ない専門医にかかった子の親たちによって組織ができていったことは、北村健太郎（2014）も指摘している⁵⁾。他の難病系の組織でも、そういった性格を持つところは多い。中には、少数の活動的な民間人が立ち上がり、周囲を巻き込んで組織することもある。いわゆる「重心」や、筋ジストロフィーの親たちの組織がそうである（立岩 2018: 124-166）。

また、運動内で対立が起こることがある。当事者同士が対立することは悪いわけではなく、対立によって組織が作られ、運動が進展することもある⁶⁾。ただ目的を達するためには、組織内での対立を回避し分裂を避けるという手段が有効である場合もある。自閉症の場合は、1952年に日本初の症例が報告されて以来、精神薄弱や精神障害など既存の領域で自閉症に対処すべきか、あるいはそれ以外の領域で対処すべきかについて、論争や対立、そして混乱があった。そのような状況で、自閉症（の親）の組織がいかにして全国組織を形成していったのか、先行研究には記述されていない。

どこでどのような人たちが集まり、いかなる性格を持つ組織を作りあげたのか、重症児施設と自閉症処遇をめぐる混乱にどう対応しながら運動を進めていったのかを

調査することで、自閉症児親の会の全国組織化の過程の一部を明らかにすることができる。とりわけ、動く重症児問題とのかねあいで混乱した状況が、自閉症児の親の会の設立が迫られた背景にあることを示すことができるだろう。

1.3. 資料・方法

先に指摘したように、自閉症の組織については、現在の組織・活動との繋がり、とりわけ黎明期のあすなろ学園の親の会と全国の親の会組織、そして自閉症施設の組織との連続性が不明瞭となっている。これらの断片的な記録を、施設の資料、施設関係者による資料などから独自に収集・分析し、黎明期である1960年代に焦点をあてて分析する。関係機関の資料として、あすなろ学園（1995, 2005, 2016）を、親の会組織の資料として、あすなろ学園資料（1964a, 1964b, 1964c, 1964d, 1966a, 1966b, 1967, 1968）⁷⁾、自閉症児親の会（1967, 1969）を、ほか、関係する資料・文献を用いて進める。

2. 動く重症児問題——1960年代のあすなろ学園のおかれた状況・役割

先の小澤（[1984]2007: 54, 60, 424）が記述した状況の中、1967年の児童福祉法改正を受けて、動く重症児問題は社会問題化した。当時の重症児施設では、自閉症を含む重度の精神・行動異常をともなう精神薄弱児の一群に、「動く重症児」という呼称をつけて処遇していた。このような障害児をもつ父母の会が公式に「動く重症児」という言葉を用いたのは、1968年と言われる（小林 1971: 19）。

あすなろ学園以外に自閉症児を専門とした入院治療・教育施設がなかった時期（1964年～1970年）の状況を、アスペルガー派の小児科医・平井信義は次のように述べる。

多くの精神病院では、成人の患者の病棟の中へ子どもを入院させたりして、診断のためには役立ったかも知れないが、治療教育の実践は殆ど軌道にのらなかった……入院するということは、診断のための諸検査を受ける場合か、家庭ではどうにも扱うことができずに収容を希望する場合かのいずれかであり、治療を期待することは望めなかった（平井 1970: 318）。

当時、病院や施設を利用する自閉症児の中で入院対象

となるのは、社会問題となっていた動く重症児＝重度の自閉症児が多かった。平井や石井哲夫（教育心理学者、当時日本社会事業大助教授・子どもの生活研究所を主宰）の取り組みによる、通所をベースとした教育機関では対処しきれないという事情から、重度自閉症児の親は救いを求めて三重県のあすなろ学園に駆け込んでいったのである。

1967年、自閉症児の親の会が設立されたのと同じ年に、7月の国会最終日に児童福祉法改正案が可決された。重症児施設びわこ学園（滋賀県、1963年4月設立）医師の小池清廉（1968年にあすなろ学園へ転籍）は、『医局連ニュース』（24、26）で、いわゆる動く重症児問題を取り巻く情勢を危惧している。その要点は、以下（1）～（4）のようになる。

（1）動く重症児の入所経路——精神病院、精薄施設重度棟、いわゆる私宅監置

……動く重症児のための病棟（開設以来分類処遇をしている）に収容されている患者の入園経路をみると、その半数が精神病院、4分の1が精薄施設重度棟で処遇困難であったもの……残りは家庭で一室に閉じ込められていたものである（小池 1967a:5）。

（2）国と医療現場との認識の隔たり

動きすぎて困る重症精薄（動く重症児、自閉症含む）で常時医学的管理を必要とするものは小児精神病院に入ればよいと児童家庭局長と中央児童福祉審議会委員の大多数のものがのべている。児童精神医学会に聞いてみると、我が国には小児精神病院は存在しない、自称しているものはあるがその内容は小児精神病院といえるものではないとの解答を得た。39年の第8回病院精神医学懇談会は精神病院における問題について……大方の良心的な医師は、小児精神病棟の対象は精薄ではなくて、純粹の小児精神障害や問題児（動く重症児、自閉症含む）に限らなければ運営も医療もなりたたなくなると結論した（小池 1967a:5、カッコ内筆者）。

（3）悪徳な施設・病院経営の出現——動けぬ重症児の飼い殺し

改正によって措置費が計上されると収入が確実になることから、物いわぬ動けぬ重症児を飼いごろし同然に収容して、少い職員によって運営を行い、営利企業を意図している病院（とりわけ精神病院）や施設があらわれはじめてきている……（小池 1967a:6）

（4）動く重症児の重症児施設からの排除

去る7月の国会最終日に政府は児童福祉法改正案を強行可決した……重症の障害児の約6割が行くべき場所を奪われ、なかでも精神障害をもつ重症児は処遇の門戸を全く閉ざされてしまう……施設職員や地域の親たちが反対していた……（小池 1967b:14）。

小池が勤めたびわこ学園は、西日本初・全国二番目の重症児施設（全国初は東京の島田療育園、1961年5月設立）で、医療、教育の機能を併せ持つことを目指した病院施設でありながら、「生活施設」であることも目標としていた。入所する動く重症児は、既存の精神病院や精薄施設重度棟では処遇困難な児童であり、いわゆる私宅監置の状況で専門機関・施設側からはたらきかけ（アウトリーチ）により入所してきた児童でもあった。これらの重症児施設は、既存の枠組みでは対処できない児童への現場の対応として出現してきたものであった。びわこ学園から8ヶ月程後にできたあすなろ学園（1964年1月設立）も、びわこ学園と同様の機能を目指した病院施設であり、動く重症児のなかでも自閉症の症状を強く持つゆえに問題児とされてきた子どもたちの問題に迫った。あすなろ学園の親の会の会報（1966a）でも、断片的に「動く重症児問題」を確認することができる。

いかに世間の人が自閉症について知らないか。厚生大臣でさえ重症心身障害児施設から（自閉症児を）閉め出すようなことをいっている。このような子どもたちをもった私たちが子どもの症状について知らせ訴えていくことが自閉症の世間の理解に役立つことではないか……これらのことを含めて雑感を書き、各地の親の会の動きなど情報が得られる限り文集に織り込む、という結論が出された（あすなろ学園資料 1966a、下線部筆者）。

またこの頃、動く重症児を受け入れていた島田療育園で、事故死や不審死と見られる不可解な出来事が複数あったことが明るみに出た（島田療育園 1969a, 1969b）⁸⁾。その原因を施設環境に見出した自閉症児の親たちは、あすなろ学園に続く治療・教育施設を全国に設立することを求めた⁹⁾。こうした親たちの願いをあすなろ学園が牽引する形で、1966年12月からの全国親の会の設立準備、そして1967年2月の全国親の会＝自閉症児親の会結成へとつながっていったと思われる¹⁰⁾。

3. あすなろ学園の親の会前史 ——1964 年 8 月以前

前述のように、あすなろ学園が設立されたのは 1964 年 1 月 15 日のことである。そしてその親の会組織が発足したのは同年 8 月 11 日である。ここでは、親の会発足以前の状況、親たちとその集まりがどういう状況であったのかについて述べる。

1960 年代、当時の行政・教育委員会関係者の認識を端的に示すのが、あすなろ学園園長の十亀史郎の発言である。十亀は 1969 年の第 10 回日本児童精神医学会総会において、以下のように述べた。

あすなろ学園に教育施設を併設すべきであることを開設当初から主張してきた。そこから精神障害児の教育権について主張しはじめたが学会がそれに対してどれだけ認識を持っていたらうか、問題の重要性にどれだけ理解を示したか。わたくしたちは、地方でこの学級設置のためにもう殆んど捨身の努力をした。障害児のための教育なんてことを言うと気がいかに教育ができるなんてナンセンスである、精薄なら分るけどというのが大方の意見で殆んど相手にもされなかった。そのとき理事会に対して援助を要請した記憶がある。そのときの返事は、〈そういうことは中央精神衛生審議会の方から学会に諮問しなさい。そしたら答えてあげましょう。〉ということであり、学会として真剣にとり組む姿勢は残念ながらなかった。事の重要性を理解していなかったものと思われる。もっとひどいことがある。この学会でも責任ある立場にあり重要な役割を担っている人であるが公的な立場であすなろを視察し学級設置の運動をやっている最中に、あすなろの園児に教育可能かどうか判定しにきた。そこで、かれは、子どもたちをものの 30 分も観察せずして、かれらには教育の可能性も必要もない、ああいうものはうっちゃっとけばよろしいのであるということをし、教育委員会に対してはっきりと言った。そのためにわたくしたちの教室の設置運動がどれ程苦境に立たされたか。これが、この児童精神医学会の非常に重要な地位にある方です。どれだけ苦境に立たされたか今思い出しても心穏やかならざるものを覚える。わたくしはその個人を追求しようとは思っていないが、児童精神医学会の会員がそういうことを言うということが、一体どうして起り得たのだらうかと、今も不審であ

り、理解できない。そういうところにこの学会の体質、構成を問題にせざるを得ないとわたくしは考える。(学会改革委員会常任委員 1970:15-16、下線部筆者)

当時の様子を、あすなろ学園の後身施設である三重県立子ども心身医療センター地域連携課課長の高橋悟(2020)も記述しており、それとあすなろ学園(1995,2005,2016)を参照に要点補足すると以下の通りである。

園長の十亀史郎(児童精神科医)をはじめ、あすなろ学園では「義務教育期間の児童・生徒に入院治療を提供するためには学校教育の保障が必要である」、「どんな障害があっても学校教育が必要かつ有効である」という基本理念を、発足前の高茶屋病院児童精神科外来・入院治療病棟の時代から掲げていた。あすなろ学園発足前の高茶屋病院病棟内学級を巡って、1962 年末から(園長以下、職員、親たちによって)精神障害だから不就学の状態にあるのはおかしいとして、院内への派遣教員や地元校通学、そして院内分教室設置を求めて県教育委員会と津市に陳情が続けられた。学園および親の会組織の発足前より活動してきた職員と親たちは「陳情書」(あすなろ学園資料 1968)を提出し、施設職員や県職員組合等の支援を受けながら、市・県議会や国会に働きかけ、駅前での署名運動なども含めて積極的に活動していた。結局、院内に教室を作ることは学園発足時には間に合わなかったが、翌年 4 月より地元の津市立高茶屋小学校、同南郊中学校への通学を可能とした。発足から 3 年が経過した 1967 年 4 月、津市教育委員会により高茶屋病院内に待望の分教室が認可され(小・中各 1 教室)、文部省初の「情緒障害児指定校」(実験)として設置される。そして 1969 年 4 月、制度化された我が国初の「情緒障害児学級」の一つとして発足した(高橋 2020 ; あすなろ学園 1995:11-12,2005:1-2,2016:56-57)。

親の会が発足する以前の 1962 年末から、あすなろにかかわる職員と親たちは、行政に教育権保障を求めて熱心に活動してきたことがうかがえる。親たちが自主的に行った陳情活動のほか、一同が集う機会となったのは 1964 年 1 月 15 日のあすなろ学園設立式であった。この設立式に関する当日の資料や式次第は残されていない。しかし、今回新たに発見したあすなろ学園資料(群)のなかにあるアルバム写真集を精査すると、おそらく記念式典が終わった後の、親・家族を対象にした専門家による研修会の様子が写されている。『あすなろ学園写真 設立当初』(1964-1968, 22 頁)の 5 頁に「昭和 39 年 開設式」

というタイトルの写真があり、会場の黒板には、次のように書かれている。

1. 精神病児の医療及び教育の可能性／川端利彦先生
2. 興味ある三症例／十亀史郎先生
3. 神経症児の入院治療／高木隆郎先生
4. 重症精神障碍児の器質的徴候／岡田幸夫先生
5. 児童病棟への期待／堀要先生
6. ソーシャルワーカーの立場から／金子寿子先生

1の「川端利彦先生」とは、大阪日赤病院の児童精神科医であり、大阪の北摂地域で在宅の重度障害児とその親たちの活動を支援してきたことで知られる。3の「高木隆郎先生」は、園長である十亀が学んだ京都大学の兄弟子にあたる。児童精神医学会の発足と事務局機能を担い、当時は講師として村上仁教授のもとで京大精神科児童室を主宰していた。また、京都学派＝黎明期の京大自閉症学派（村上門下は、高木、前述の小池、十亀、小澤がいる）をとりまとめた。4の「岡田幸夫先生」は大阪市立大の小児精神科医で、黎明期の自閉症問題に取り組んできた。5の「堀要先生」は、名古屋大学教授で精神科児童室を主宰し、1952年に驚いたえ子が日本初の「自閉症症例K」を報告した際の後見人をつとめた。6の「金子寿子先生」はソーシャルワーカーであるが、堀と同じ名古屋大学医学部に勤めていた。1969年に児童精神医学会で紛争が起こって以降、家族・地域支援の立場から、自閉症の鑑別診断や症例報告に偏重してきた学界に一石を投じる学会改革委員会として小澤・十亀とともに活動し、自閉症児の教育、生活保障の問題について積極的に発信していく。名古屋、愛知の自閉症児の親の会の世話人もつとめ、愛知県の親の会である「つばみの会」の組織化・発足にも寄与した。金子は当時、名古屋大学で自閉症児の親・家族も含めたセルフヘルプグループの組織化、そして退院後のアフターケアや在宅支援のための地域連携にも関わっていたことから、それに関する講話がなされた可能性は高い。あすなろ学園の職員と保護者たちも、今後の親の会の組織化やその活動指針について、なんらかの影響を受けたことも考えられる。

4. あすなろ学園職員のよびかけ

1964年8月11日、あすなろ学園の「親の会」が結成され、全国各地から治療に訪れていた自閉症児の親たち

が一堂に会した（あすなろ学園資料1964a）。そのきっかけとなったのは、学園職員による呼びかけである。

(1) 1964年8月以前「あすなろ学園 第一回 父母と職員の懇談会開催通知」

この「開催通知」は便箋に手書きされており、1頁分のみが発見された。作成者は不明である。作成年月日と配布日も不明であるが、懇談会の開催日である1964年8月11日以前なのは確かである。以下に整理して書き起こす。

あすなろ学園 第一回 父母と職員の懇談会開催通知

日時 S.39. 八月十一日（火）午前十時

場所 三重県立高茶屋病院 あすなろ学園

議題 職員紹介／父母と職員の会設置について／学園費について／派遣教員の問題

その他問題の多いこの面の教育のよりよい発展を図るためにも皆様と共に努力いたしたいと思います。尚此の日、十二日から夏休みに入るお子さんはお母さんお父さんと共に帰宅していただきます。昼食の御用意はできませんし近所もあまりお店もあまりございませんのでお手数ですがお弁当〈以下不明〉（あすなろ学園資料1964a、下線部筆者）

ここでは、「父母と職員の会設置」が提案されている。また「派遣教員の問題」とあり、精神障害児ではほとんど前例のなかったベッドサイド教育、院内教育、分校、分教室設置を目指していたこともわかる。この「開催通知」は、病院の窓口である地域連携室・相談室を経由して、家族側に周知されたと思われる。

(2) 1964年8月1日付「あすなろ学園 父母と職員の懇談会開催について」

同様に以下の懇談会の案内でも、「父母と職員の会」設置が議題となっている。これも手書きされており、作成者はわからない。以下に整理して書き起こす。

あすなろ学園 父母と職員の懇談会開催について

毎日暑い日が続いております。御うちの皆様方はそれぞれお忙しいことと存じます。学園では子供たちは元気に勉強したり遊んだりしております。

さてこの度あすなろ学園で子供たちのため御父母と職員懇談会を左記の如く開催いたしたいと思いま

すので必ず御出席賜りますようお願いします。

記

日時 八月十一日（火）午前10時

場所 三重県立高茶屋病院 本館 日本間（ソーシャルセンター内）

議題 一（ママ）職員紹介（メモ書きで「進行紹介院長」と追記がある¹¹⁾）

一. 父母と職員の会設置について

（一）派遣教員の問題について 諸機関に情緒障害児治療教育に関する理解を深めるべく務めること。

（二）その他の問題について 学園のよりよい発展のために皆様と考え促進していきたいと思ひます。

（三）子供についての話し合い 家族でお困りになっている（ママ、下線あり）問題を皆様と共に話し出来れば幸甚です。

尚、（ママ）昼食の用意はございませんので、近所にもあまりお店もございませんのでお手数ですがお弁当をご持参していただいた方がよろしいかと思ひます。

昭和三十九年八月一日 三重県立高茶屋
病院内あすなろ学園 職員一同
（あすなろ学園資料 1964b、下線部筆者）

この企画の背景には、医療職であった院長・園長ら医師、看護婦のほか、実際に現場で児童の生活支援を担当する児童指導員、保母、そして各種の行事企画・案内および書記・広報を担当する地域連携室・相談室の職員、ソーシャルワーカーの存在があった。

「派遣教員の問題」は1962年末から陳情活動を重ね、1967年4月、全国初となる情緒障害児学級（実験）実現の前段階として、ようやく1967年3月に市教育委員会から院内派遣を実現したものである。また「家族でお困りになっている」問題、つまり入院児童の問題や家庭支援と生活保障の問題についても、「父母と職員の会」発足を見越して話し合われていたことが確認できる。

5. 1964年8月11日 「あすなろ学園の親の会」発足

1964年8月11日、「第一回あすなろ学園職員と保護者の会」が開催された。手書きの議事録には以下のように書かれている。整理して示す。なお略字により、「西本」

のみ推測である。

第一回あすなろ学園職員と保護者の会

開催日 昭和39年8月11日（火）午前10時より午後3時迄

出席者 職員 井上院長 十亀 Dr. 田中 Dr. 市川 Dr. 岡本 psw. 青井 psw 久保田婦長 石坂 宮崎 平松 西 田中 藤川 松岳 粕谷 松浦 橋本 濱崎 白藤 以上19名

保護者 杉本好美（母） 野村（母） 戸野（母） 東山（母） 丸浦（父・母） 嶋田（父） 押尾（父） 北川（母） 西本（姉） 早坂（母） 村井（母） 米川（母） 柴田（母） 井手（母） 浅井（母） 伊藤（母） 太田（祖父） 増田（母） 以上23名

場所 あすなろ学園西デイルーム（あすなろ学園資料 1964c）

職員の「青井 psw」は青井光子のことで、のちに十亀と結婚する。保護者の「丸浦（父・母）」は、東京地検職員の丸浦岩夫と厚生省職員の丸浦喜久子夫妻のことで、のちに東京の親の会、全国の親の会設立の中心メンバーとなる。さらに千葉県のいすみ学園（全国で8番目の自閉症者施設、法人名槇の里）の発起人を、東京都職員の原井利彦・全国親の会機関紙『いとしご』編集委員の原井清子夫妻とともにつとめた。「押尾（父）」は押尾匡のことで、『あすなろの祈り』（講談社1970）で知られる、岐阜県自閉症協会の設立メンバーである押尾玲子の夫である。「北川（母）」は、押尾と同じく岐阜県出身で、岐阜県自閉症協会の設立メンバーであった。また、「嶋田（父）」は黎明期の愛知県自閉症協会のメンバーであった日本福祉大学教授の嶋田豊（哲学者）のことと思われる。議題では、園長の十亀が自閉症児の教育問題について治療者の立場から問題提起しており、病院でありながら「学園」と名付けた所以——治療と教育をあすなろ学園運営の両輪とすると伝えられる——が垣間見える。

あすなろ学園の公式資料によれば、「自閉症児を受け入れる場所が当時は他にまだほとんどなかったため、自閉症児が全国各地からやってきた」（あすなろ学園2005:2）とある。また親の会および関連施設の現場では、あすなろ学園とその周辺には、東京、大阪、愛知などの大都市圏を含む全国各地から自閉症児の家族が集まってきたと語り継がれている。例えば1966年5月23日発行の会報では、「あすなろ学園保護者と職員の会（あすなろ学園の親の会）」の役員選出について、出身地も記述されている。

……世話係 岡本ケースワーカー……

4月の総会にて新役員が選出……

会長 荒井氏（大阪出身） 副会長 西村氏（大阪出身） 石坂保母

書記 千葉氏（津市出身） 岡本ケースワーカー

会計 吉田氏（愛知県出身） 市川さん

会計監事 北川氏（岐阜市出身） 君和田氏（東京出身）……（あすなろ学園資料 1966a、文責者岡本、下線部筆者）

役員の構成を見ても、全国から集まっていることが明らかである。親の間で度々「先生」と呼ばれていた職員の岡本¹²⁾は、ときには「世話係」となって各種の年間行事を企画し、親の会の会報の「書記」も担当していた。ソーシャルワーカー（前出資料ではケースワーカーと表記）が病院と当事者・家族の媒介と調整機能を担いつつ、家族会の組織化と自立に向けて、親たちが力を最大限に引き出せるよう支援していたことがうかがえる。

黎明期のあすなろ学園親の会役員で岐阜県自閉症児親の会設立メンバーの押尾玲子は、『あすなろの祈り』（講談社 1970）の中で当時を振り返っている。

必死に求める救いの道

……出生地は広範囲……遠く中国地方や四国から、さらには北海道まで加わり、まことに多彩であった。このような場所がどこにも見当たらなかったからである。いかに親が必死に救いの道を求めたかがこれだけでもわかっていただけよう。……「お近くてよろしいわね」……当然のことだ。北海道や四国から見たら岐阜など隣のようなものである。月一回の例会（＝あすなろ学園親の会）に出席するだけでもたいへんなことであろう……日本の首都であり、政治、経済、文化の中心である世界的な大都市は、少なくともこの時点で医療や社会福祉の面で中心とならなかったようである……東京組みはいつも二人ないし三人で前日の夜行に乗って面会に来られていた（押尾 1970:275-276、カッコ内・下線部筆者）

文中の「東京組み」には、氏名は記述されていないが、君和田史枝、石丸晃子、須田初枝ほか、のちの日本自閉症協会そして各地の自閉症施設づくり運動の発起人会和それらに大きな影響を与えてきた家族会第一世代の主要なメンバーたちが含まれている。全国親の会機関紙に掲載されたあすなろ学園の親の会のたよりも、「……昨年

の一月末、最後のチャンスだと、三重県知事に陳情する日、朝早くから東京・大阪・一宮のお父さんお母さんが駆けつけてくれました」（あすなろ学園保護者と職員の会 1968、下線部筆者）とあり、陳情活動のために全国の親が三重まで駆けつける様子が記されている。

6. あすなろ学園の親の会の活動の広がり

前掲のように、あすなろ学園は病院施設でありながら、就学猶予・就学免除の状況にあった自閉症児の教育権、家庭での生活の問題を懇談会の議題として扱っていた。これは1967年2月に東京で設立された全国親の会の大きな運動指針となったものである。1967年4月、あすなろ学園は全国初の情緒障害児学級（実験）を設置して全国制度化の起点となったが、1967年2月に東京で結成される「自閉症児親の会」が運動の大きな方針として掲げた教育権保障、在宅生活・家庭支援の問題について、あすなろ学園の職員と保護者たちは1964年8月親の会発足時には既に取り組み始めていたのである（あすなろ学園資料 1964a, 1964b, 1964c）。この会は「あすなろ学園保護者と職員の会」として活動を活発化し、退所者の様子や悩みを共有して考えていくため、退所者の家族にも参加を呼びかけた。例えば1966年6月の例会では、次のような資料が配布された。

会を広げましょう！

……退院したりすると何ら会のようなすがわからない。……精神障害児とその家族が背負っている問題を心理的・社会的に検討する会として会を充実するために広げましょう。また退院後の子どもたちを知る一つの手がかりになるのではないか……（あすなろ学園資料 1966b）

やがて、あすなろ学園の親たちは、地元の親のつながりを通して各地に親の会をつくり、また新たにできたつながりによって全国組織を形成していった。高茶屋病院院長（本院）の井上正吾は、黎明期のあすなろ学園の親の会の文集『あすなろ第3集（1967年度）』の「はじめに」で次のように言う。

NHK テレビの「自閉症児の記録（ママ）」¹³⁾が放送されて、社会の人々の目は、自閉症児や情緒障害児にたいして、大きくみひらかれました。この子どもたちに対しては、治療の中でも、社会的治療が必要

……この子の親たちは、各地に親の会を結成しました。子どもの理解のために、話しあい、努力しあうだけでなく、またおたがいのなぐさめにも役立てました。さらに、社会活動として施設の増設、特別学級の設置、通所施設の要望等と活発に、しかも具体的に運動してきました。しかし、日本のまずしい社会保障の現況では、なかなか実施できないのです。われわれとしては、もっとねばり強く、この活動を続けましょう。四十三年度か、駄目なら四十四年度を期しましょう（井上 1968:4-5、下線部筆者）

これが書かれたのは、1967年2月全国の親の会「自閉症児親の会（事務局・東京の親の会）」結成の翌年度である。「四十三年度か、駄目なら四十四年度を期しましょう」というのは、自閉症支援の制度化のことを指す。これは、1968年文部省「情緒障害児学級」（自閉症を対象を含む）制度化と、あすなろ学園の指定（あすなろ分校が全国初の情緒障害児学級として発足）、1970年厚生省通事務次官通達「自閉症児療育事業要綱」制度化とあすなろ学園の指定（＝いわゆる「3公立病院の自閉症児療育施設指定化」）につながった。

7. あすなろ学園の親の会と 東京の親の会＝全国親の会の連続性

1967年3月15日の「あすなろ学園保護者と職員の間々報 No.7」にある「1. 親の会報告」、「一. 東京自閉症児親の会設立大会に参加して（＊押尾（岐阜）、君和田（東京）が担当）」では、その様子が詳述されている。あすなろ学園親の会役員であり、東京および全国の親の会の設立中心メンバーでもある君和田の報告について、要点を抜粋する。

常陸宮殿下妃や殿下を迎えて開催され、あすなろ学園からは岡本先生、石坂さん、押尾さんが出席し、当日は約三五〇名程の父兄も参加……東京と云う政治のおひざ元にありながら自閉症児を含む情緒障害児対策が-okれている現状……どの親の会（他の障害児の会）でもある程度御専門の先生方の下に親達が終わして行き一つの会にまとめ上げた云う例が少なくないが、今回東京に発足した自閉症児親の会はすべて親自身の力でまとめ上げた……。

特に自閉症児の場合、世界的に二つの分類があり一つにまとめる事は非常に困難な事であろうとある

先生がおっしゃっています……悩める親達の純粋な気持ちが会を偏った方向にだけは行かない様にしています……特にあすなろ学園に本年より教師派遣のニュースは東京関係者の間でも注目されました……あすなろ学園がこれからのよい意味でのモデルになる為には親達も新たな気持ちであすなろ学園を応援し、親みずから勉強し子供達と明るい未来に歩みを進めたいと思います（あすなろ学園資料 1967、カッコ内筆者）¹⁴⁾。

東京および全国の親の会の組織化について大きな役割を担ったのは、三重・あすなろ学園で子どもをみてもらっていた東京出身の親たち¹⁵⁾である。そして、自閉症児の教育的取り組みを始めていた、前出の平井信義・石井哲夫のもとに集まってきた親たちである。石井はのちに日本自閉症協会会長と社会福祉法人嬉泉理事長を長くつとめるが、この頃主宰していた「子どもの生活研究所」では、自閉症に特化した療育を開始し、定期的に母親ミーティングなどを実施していた。1967年発足の東京の親の会および全国の親の会の発足時には、同研究所が事務局機能を担っていた。

ただ東京での組織化の過程をみても医師側が患者の名を知らせない¹⁶⁾といった事情があって、例えばあすなろ学園に子をいれた親が地元の既存の何らかの障害児の親の会のつながりを通じて自前で自閉症の組織をつくりはじめていったことがあった。そして平井や石井らの教育機関とあすなろ学園の双方にも関係していく親たち——1980年代以降、あすなろ学園の年長児者問題を背景にした成人入所を可能とした各地の施設づくり運動の発起人たち——が後の日本自閉症協会の活動の中核的役割を担っていく。このように、東京および全国の親の会の成立・展開過程においてもあすなろ学園の親たちは積極的に関与していた。

8. まとめと考察

動く重症児問題を背景として、あすなろ学園の親の会と、全国親の会との連続性とその周辺の詳細は、次のようなものである。

- ① 自閉症児はどの場所、どの領域で対処すべきかという混乱した状況のなか、大人の精神病院のほか1961年以来一足早く成立していた重症児施設では動く重症児の一群として対処されていた。しかし、その施設環境では限界もみえてきており、また1967年法改

正の動向による混乱も重なって、自閉症児はますます行き場を失ってきていた。

- ②うえにみた問題を背景としながら、1967年以前には、すでにあすなろ学園には全国から自閉症児とその親たちが集まってきており、その親たちがつながり、そして全国に散らばっていく。散らばっていく過程やその後においても親の会の役員とその世話人である職員が介在し、全国の情報が集まる拠点となった。
- ③そして、1967年2月の自閉症児の親の会（全国組織）の設立の頃には、あすなろ由縁の親たちが各地の親の会と全国組織の事務局機能をおく東京の親の会をつなぐ中心的メンバーとなっていた。

1960年代前半より独自の活動と存在感を放っていたあすなろ学園とその親の会は、自閉症支援の拠点づくり運動を担った起点の1つとして、全国の親の会の活動指針にも一定の影響をもつものであったといえる。これらの影響しあう運動や取り組みの詳細と、周辺の状況の検討について、とりわけ、「自閉症には世界的に2つの分類があるためになかなか1つの全国組織にまとめることは難しい」とあるように学説の対立を背景に「ある先生」（あすなろ学園の職員）が悩み考えていたあすなろ学園の親の会と全国の親の会の組織化の過程の詳細について、今後の課題としたい。そしてその運動と実践およびその周辺とそれらの過程における様々な状況——理念／現実と、理論／実践のあいだで生じる種々の障壁／連帯、衝突／共存などのあり様——の詳細について、分析・検討していきたい。

注

- 1) 日本自閉症協会はもともと親の会全国組織であるが、専門家代表が会長に、親・家族の代表が副会長につくことが旧称時代より慣例となっている。1990年代中頃より手記やインターネットメディアなどを通じて本人活動が活発化し、2000年代には当事者部会や高機能部会といった本人活動とその組織化が各地にみられ始める。
- 2) 日本においては、それは正確には牧田一平井論争であった。慶大神経科の牧田清志（精神科医）はカナー派とされ、また日本総合愛育研究所を主宰したお茶の水女子大（後に大妻女子大）の平井信義（小児科医）はアスペルガー派とされる。
- 3) 全国重症心身障害児（者）を守る会は1964年6月に発足、その前史の1つとして、日赤産院の小児科医・小林堤樹とそのもとに集まった重症児の親・家族の活動がある。
また重症児と自閉症児の関係では種々ある。例えば東京の自閉症児の親である石丸見子は長男が2歳の時（＝1960年）日赤産院時代の小林を訪れたが既に診療室のドアには診療休止の張

り紙がしてあり（石丸 2002: 124）、その後色々な経過を辿って三重県・あすなろ学園につながり、1965年同園に入所、そしてその後日本自閉症協会副会長、全国自閉症者施設協議会初代会長として自閉症児の親の運動の中心メンバーとなるというように、いわゆる「自閉症のメッカ（あすなろ学園）」、「あすなろ詣で」（宮本 2017: 3）をしてきた自閉症児親の会の第一世代、という経緯がある。

- 4) 参照に植木（2021）。
- 5) 他日本におけるこの種の動きとその周辺についての研究は種々あり、例えば精神障害者の家族会の研究では吉村夕里（2009）、また腎臓病と人工透析の患者会の組織化に関する研究では有吉玲子（2013）がある。
- 6) 例えば精神障害者の運動で対立したままの連帯、連帯の中の多様性について論じたものに伊東（2021）がある。
- 7) 関係者の協力を得て筆者が新たに発見した資料（群）のうちの1つである。筆者はあすなろ学園の年長児者問題から派生し、あすなろ学園の最後の親の会会長西村博機（現・おおすぎ理事）が自閉症総合援助センター施設法人設立発起人会の会長をつとめる「おおすぎ・れんげの里」の立ち上げスタッフとして活動してきた。親の会・施設関係者の皆様には記して感謝申し上げ今後の活動・研究へとつなげていきたい。
- 8) 1965年6月昼過ぎに判明した自閉症児の死亡では、警察へ事故報告をせず即日小林の母校慶大にて検体、終了後の21時には納棺して通夜、翌朝火葬、午後骨壺に収まって帰宅ということがあった。また、1964年8月脳性小児マヒ児への定位視床破壊術、1967（～1969）年園長「重症児への断種術の許可」を訴える、1968年に小林園長が「テンカンを伴う生ける屍」と発言する、1968年「自然骨折」という事故による骨折、などがある（島田療育園 1969a, 1969b）。また園長の著書・小林（1966）をみると、自閉症児の療育実践記録というより、島田療育園で起きた自閉症児の死亡事故に関して、家族への小林なりの事故説明とも受け取れる。
- 9) 『いとしご』創刊号（1967）で島田療育園の自閉症児の死亡事故はこのような施設環境では誰も責められないと寄稿した全国親の会初の陳情書の代表・横山佳子（1967）は、あいの家（茨城、1988年設立、全国8番目、法人名梅の里）設立発起人をつとめたように、各県に最低一カ所の自閉症支援の拠点となる施設をつくっていかうという、あすなろの木からあすは檜の木のように育っていかうというふうに、各県に由縁のある木の名称を法人名に入れる自閉症施設づくり運動（あすなろ学園（三重）→檜の里・あさけ学園（三重）→けやきの郷・初雁の家（埼玉）→檜の里・いすみ学園（千葉）→梅の里・あいの家（茨城）のよう）を推進する自閉症児親の会の運動の中核を担っていく。
- 10) その詳細の分析・検討は別の機会とする。
- 11) 「院長」とは井上正吾（精神科医）のこと。
- 12) たびたび本稿に登場する「岡本」とは、あすなろ学園黎明期ソーシャルワーカーの岡本聡子のこと。
- 13) 正確には1966年8月26日19:30～NHK現代の映像「孤独なたかい 自閉症の記録」のこと。あすなろ学園が取材され、全国放映された。全児協によると次のようにある。

1964年1月に日本で初めての自閉症児病棟……「あすなろ学園」……1967(ママ)年8月にNHK現代で「孤独な戦い(ママ)」と題して全国放映され、自閉症治療に対する関心が高まるきっかけとなった(全国児童青年精神科医療施設協議会 2021、下線部筆者)。

- 14)「最初の名簿作製にしても現実にはきびしく医師は患者の名前の公表をさけるので、個人の口から口へと伝わり」、「それを聞いた人達が同じ悩みを持っていると云う安心感と云うか、連帯感が病気の軽重や病院とか相談所の所属をとわず一つにまとめあげる力になったのだと思います」等々とある(*担当者 押尾(岐阜)・君和田(東京))(あすなろ学園資料 1967、手書き)。
- 15)例えば、須田(元・日本自閉症協会副会長)の子息は3歳の時に平井に1年間カウンセリングの結果「自閉症」と診断されている(須田 2010: 147)が、須田ら初雁の家の立ち上げ時の中心メンバーは三重県あすなろ学園(いわゆる京都学派・十亀一派はアメリカ児童精神医学とカナーの論文を重用したといわれる)で治療・療育等何らかの支援を受けてきたものでもあった。
- 16) 14)と同じ。

文献

- あすなろ学園編,1995,『あすなろの10年』,三重県立小児心療センターあすなろ学園。
- ,2005,『あすなろの20年』,三重県立小児心療センターあすなろ学園。
- ,2016,『あすなろの30年』,三重県立小児心療センターあすなろ学園。
- あすなろ学園保護者の会文集編集部,1968,『あすなろ第3集(1967年度)』。
- あすなろ学園保護者と職員の会,「『あすなろ学園保護者と職員の会』について」,自閉症児親の会,1968,『いとしご』(2): 62。
- あすなろ学園の親の会アルバム写真集,1968,『あすなろ学園写真 設立当初』。
- あすなろ学園資料,1964a,「あすなろ学園 第一回 父母と職員の懇談会開催通知」(1964年不明(8月以前))。
- ,1964b,「案内書「あすなろ学園 第一回 父母と職員の懇談会開催について」」1964年8月11日)。
- ,1964c,「議事録「あすなろ学園 第一回あすなろ学園職員と保護者の会」」(1964年8月11日)。
- ,1966a,「『あすなろ学園保護者と職員の会報(1966年4月総会報告／々年5月例会報告)』(1966年5月23日)。
- ,1966b,「『あすなろ学園保護者と職員の会報No2(1966年6月月例会報告)』(1966年6月23日)。
- ,1967,「『あすなろ学園保護者と職員の会々報No.7』(1967年3月15日)。
- ,1968,「あすなろ学園 高茶屋小学校／南中学校 分教室建築についての陳情書」(1968年9月17日)。
- 学会改革委員会常任委員,1970,「第10回日本児童精神医学会総会」,『児童精神医学とその近接領域』(11) 1: 1-40。
- 平井信義,1970,「社会的活動について」,平井信義・石井哲夫編,1970,『自閉症児の治療教育』日本小児医事出版社: 317-324。
- 平井信義・石井哲夫編,1970,『自閉症児の治療教育』日本小児医事出版社。
- 井上正吾,1968,「はじめに」,あすなろ学園保護者の会文集編集部,1968,『あすなろ第3集(1967年度)』: 4-5。
- 伊東香純,2021,『精神障害者のグローバルな草の根運動』生活書院。
- 宮本隆彦,2017,「翔の会苦心談「陽だまりを求めて」軸足」(翔の会 2017年3月例会資料)。
- 石丸晃子,2002,「わが国の自閉症児・者処遇の歴史」,吉川正義,2002,『自閉症・学習障害を追いかけて 母の目、記者の眼』ぶどう社: 117-124。
- 自閉症児親の会,1967,『いとしご』(1)。
- ,1968,『いとしご』(2)。
- 小林堤樹,1966,『自閉性精神薄弱児』福村出版。
- ,1971,「いわゆる「動く重症児」の問題」,島田療育園,1971,『島田療育園のあゆみ No.5』。
- 小池清廉,1967a,「重症心身障害児療育施設入所基準の改悪について——精神医療との関連——」,『医局連ニュース』(24): 3-6。
- ,1967b,「児童福祉法改正(重症心身障害児施設入所基準の改悪等)とその後の問題」,『医局連ニュース』(26): 14-15。
- 久保紘章,1980,『自閉症児とともに——自閉症児をもつ家族の記録——』ルガル社。
- 中山忠政,1997,「日本における自閉症施設の成立と展開—その過程と問題点—」,『障害者問題史研究紀要』(38): 65-69。
- ,1998,「わが国初の自閉症成人施設「あさけ学園」の設立経緯—「思想」をその分析視点として—」,『心身障害学研究』(22): 127-133。
- ,1999,「わが国における自閉症福祉施策の変遷に関する研究—自閉症児施設を中心に—」,『社会福祉学』40(1): 271-286。
- 押尾玲子,1970,『あすなろの祈り』講談社。
- 島田療育園,1969a,『島田療育園のあゆみ No.2——1963～1965』。
- ,1969b,『島田療育園のあゆみ No.3——1967～1968』。
- ,1971,『島田療育園のあゆみ No.5』。
- 小澤勲, [1984] 2007,『自閉症とは何か』洋泉社。
- 須田初枝,2010,「自閉症の息子と過ごした五〇年の人生」,『児童心理』909: 146-151。
- 立岩真也,2018,『病者障害者の戦後 生政治史点描』青土社。
- 高橋悟,2020,「022 あすなろ」(私信)。
- 植木是,2021,「自閉症児の親の会(日本自閉症協会)の前史的活動に関する一考察——1964年設立の三重県あすなろ学園とその親の会関係資料から」障害学会第18回大会。
- 横山佳子,1967,「私たちの訴え」,自閉症児親の会,1967,『いとしご』(1): 5-8。
- 全国児童青年精神科医療施設協議会,2021,「協議会のあゆみ」,(2021年8月1日取得, <http://jccami.jp/about-us/history/>)。

Parents Association of Autistic Children and the process of National organization in the early days in 1960s : From the document of Mie Asunaro-Gakuen and the meeting of the parent and "Autism Society Japan" concerned

UEKI, Nao

About a process of the source of the organizations of the family society for Autistic Children in Japan and organization of the whole country, as for most of the real images, it is not revealed. Therefore, in this study, I focus at the dawn in the 1960s, and I collect the documents of the meeting of parents of the 1960s, I analyzed them. As a result, the following things became clear in the document analysis of the Mie Asunaro-Gakuen where the families of the autistic children gathered from all over the Japan. At the first, the families of each place organized the family society in each place newly. And the second, they led to the organization of the family society of the whole country in February, 1967. In the background, there was the problem of severe disabilities children who moved.

Keywords : Family society for Autistic Children (Autism Society Japan), Organization of the family society, Autism facilities, Autism facility "Mie Asunaro-Gakuen"

